

心理支援場面において「巻き込まれる」ことの是非

著者	永島 聡
雑誌名	神戸常盤大学紀要. 別冊
号	14
ページ	1-1
発行年	2020-10-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1492/00001112/

1-P-1

心理支援場面において「巻き込まれる」ことの是非

永島 聡¹⁾

一般的に心理的な支援の場面において、被支援者の感情に支援者が「巻き込まれ」て、支援者自身も感情的になってしまうことは、望ましくないことであるとみなされていると言っているであろう。被支援者が怒り、悲しみ、寂しさ、苦しさ等々を表出したとき、支援者は取り乱すことなく冷静に接しつつ、被支援者の感情はあくまでも被支援者のものとして、相手の立場に身を置いて *empathize* (共感) することが、支援的なあり方なのである。

一方 Travelbee にとっての *empathy* は、単に患者の内的世界を理解するための段階に過ぎない。より高次の *sympathy* において、支援者は被支援者に助力したいという感情に駆られ、支援が可能になる。彼女は支援者自身が何らかの感情を抱きそれを表出することに否定的ではなく、むしろ巻き込まれること (*involving*) をよしとしている。そこから支援者と被支援者は、互いの立場を超えて、まさに人間対人間の関係性が生じ、支援的な方向へと向かうことができるのである。他にも例えば、Seikkula らのオープンダイアログにおいても、支援者が支援者自身の感情をありのまま体験し表出することには肯定的である。

支援者が巻き込まれて自分自身の感情をあらわにすることが、被支援者の支持された感に繋がっていくことは実際にあるのである。このことについてあらためて詳細に検討する必要があると思われる。

1) 保健科学部看護学科